仏教を身近にする伝道誌　　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

dohyo

2021 秋季号

年間特集　「おてら」

第四回・笑いつつ「あの世へゆく準備」　平野 智照さん

連 載

あなたのいのちの物語　子どもの悲しみがもつ力
伝承を科学する　綴の錦を解きほぐす
道しるべ　玉虫厨子

年間特集

「おてら」

第四回
平野 智照

笑いつつ「あの世へゆく準備」

お父さんは何のために　生れてきたのかな
ぼくと戦いごっこをするためだね
お母さんは何のために　生れてきたのかな
ぼくに会うためだね
ぼくは何のために生れてきたのかな
きっとお父さんとお母さんを　大好きになるためだね
もしもママがしんだら　ぼくはパイロットになって
お母さんをさがす
だって天国いったら　あえなくなるから
お空にいくまえに　つかまえて
３００年いっしょにくらす
お母さんがいなくなったら
さびしいから　しないで

この詩は、白石一貴君が小学五年生のときB4大の和紙に毛筆で書いている。3歳になる前、自閉症のある知的障害者と診断された白石君だが、熊本支援学校を卒業（2016年）後は、同県の障害者労働センター「おれんじ村」に就職したという。

私がこの詩と出会ったのは、天草を旅したときだった。郷土資料館の展示室に障害者の作品が展示されており、読んだ瞬間、私は自身の幼少期の記憶に飛んでいた。

どういうわけか、私は五、六歳の頃、夜になると「死ぬこと」に怯えて、銀河宇宙をさまよっている夢を毎晩のように見続けていた。朝起きると涙が固まったのか目ヤニがいっぱいで目が開かず、母が瞼を拭いてくれるのが朝の儀式のようになっていた。銀河宇宙を独りさまようのは怖ろしく、白石君のようにパイロットにはなっていないが、泣きながら父や母、姉をさがしていたのかもしれない……。

「この世のことで精いっぱい」
そんな中で、あの世のことも夢想する

あの世へゆく準備…

白石君の詩は両親の承諾のもと、『あの世へゆく準備』という本の冒頭7ページにわたって掲載させてもらった。この本には、白石君や私を含め二四人の原稿を載せているが、友人知人に執筆を打診した時の返答が、二つのパターンにわかれたのがおかしかった。

「おもしろいタイトルだね、何とか書いてみます」と即答する人。

「いやぁ、この世のことで精いっぱい。とてもそんな心境にはなれない」と当惑気味に断る人。

前者をA、後者をBとしておく。あの人ならAだろうと想っていたところ、Bだったりしたこともあるが、7割方は想定内での回答だった。こうして約一年後、『あの世へゆく準備』の発行（2017年3月5日）となった。

「花一輪に宇宙があるように　誰の手のひらにも宇宙がある」

そんな想いを込めて、「手のひらの宇宙BOOKs」（商標登録済み）は2007年に誕生し、『あの世へゆく準備』はそのシリーズの十二冊（号）目となる。

あの世へゆく準備
単行本・並製本272ページ

いまの私の年齢からして「あの世」は遥か遠い世ではなくなってきた。十年が数年に感じるほどに刻々と近づきつつあるが、「この世のことで精いっぱい」というのが、偽らざる日常である。そんな中で、あの世のことも夢想する。

人はとりあえず食うために生きなくてはならないから、老後や死後のことなど頭の中から追い払う。そして気が付いたら、その時が目の前に迫って慌てる……、というのが大方だろうと思う。その証拠に、本がますます売れなくなっているのに、「老い」や「死後世界」に関する本が売れるのは、高齢社会のニーズというだけでなく、目前に迫って慌てる人が少なくないからだろう。

老いも死も「笑わずにはいられない」という心境に至るのがよかろう

それにしても最近、ある著名作家の本の新聞広告を見たとき、「またか！」と暗澹たる気持ちになった。『老いる意味』―老人性うつを告白し、克服した話題作、十万部を突破しベストセラー第1位、だという。出版人として私個人としても、やりきれなさと悔しい思いが複雑に交錯する。

今日は死ぬのにもってこいの日だ…

私はいま「老成楽」と「笑わずにはいられない」という二冊の本を企画中で、古今東西のいわゆる著名人の著書を乱読している。人類はその昔から、普遍的テーマとしての「老いや死」について哲学し、その中から宗教も生まれてきたわけだが、どんなエライ人のご高説を聞いても、この問題から逃れることはできない。それならいっそのこと、老いも死も「笑わずにはいられない」という心境に至るのがよかろう、というのが私の結論である。

『あの世へゆく準備』の執筆者たちは、多様な想いを自由に語っているが、そこに共通するのは、利己的自我の服を脱ぎ捨て、感謝しつつあの世へ行きたいという願いである。私もその一人なのだが、家内はそんな私の気持ちより、あの世へ行った後のことを案じている。

数年前、家内は大学ノート大の「エンディングノート」を私に贈ってくれた。そして年に何度かは「ちゃんと書いておいてね」と忘れっぽい私に念押ししてくれる。実にありがたい配慮だが、未だ二行も記していない。ただ日頃、万が一のとき「ガン治療は受けない、延命治療もしない」ということだけは伝えている。とにかく楽しみ笑いつつ「あの世へゆく準備」をしたいからだ。

アメリカインディアンの古老の言葉をタイトルとした本がある。私もその言葉を胸に、下駄の音を鳴らしながら、散歩する気持ちであの世へ行きたいと念じている。

「今日は死ぬのにもってこいの日だ」と。

手のひらの宇宙BOOKs

平野　智照（ひらの・ともてる）
1948年生れ　千葉県出身。出版・企画（有）あうん社代表取締役
2004年、西宮市から丹波市へ移住。2014年より「手のひらの宇宙BOOKs」シリーズ開始（現在、通巻30号）。
著書（ペンネームは平野隆彰）：『シャープを創った男　早川徳次伝』、『穴太の石積み』、『心の監督術』、『鯨が飛んだ日』他、編著書多数。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

16話目

「子どもの悲しみがもつ力」

エーリヒ・ケストナー『飛ぶ教室』

寄宿学校で共同生活をするギムナジウムの生徒たちの、クリスマスを前にした日々を描く物語だ。「まえがき」は子どもの悲しみについて語っている。「どうしておとなは、自分の子どものころをすっかり忘れてしまい、子どもたちにはときには悲しいことやみじめなことだってあることを、ある日とつぜん、まったく理解できなくなってしまうのだろう。」

主要な主人公はジョニー（ヨナタン）・トロッツとマルティン・ターラーだ。ジョニーが脚本を書いた「飛ぶ教室」がクリスマス前に演じられる。それに先んじて起こったいくつかの出来事が描かれる。ギムナジウム生と実業学校生との戦い、世捨て人のような「禁煙」先生と「正義」先生との再会、上級生扮する幽霊の仮装行列、弱そうなウーリが危険を冒して脱皮する話など。大食いのマティアス、頭の回転の早いゼバスチアンなど個性的な子どもたちが支え合って成長していく。とりわけ主人公2人は深い悲しみを通して生の真実を受け止めていく。

クリスマスのうれしい帰宅が悲しみに転ずることもある。すべてに有能で正義感が強く、絵を描くのが上手なマルティンだが、クリスマス直前になって、思わぬ手紙が家から届く。貧しさのため、クリスマスに帰宅するためのきっぷ代を送ることができないという母親からの手紙だ。「涙を流さないで」と記す母の字がにじんでいる。涙だろう。それを見るとこらえきれずに涙がこぼれてしまう。楽しそうに支度をして帰っていく友だちを見送りながら、マルティンは皆に事情を話すことができず、「泣くこと厳禁！」と繰り返し自分に言い聞かせる。

寂しげなマルティンに気がついて、信頼されているベク先生、あだ名は「正義さん」が近づいてくる。「きみは帰りたくないのかい？」「ぼく、どっちかと言うと、理由は言いたくないんです、先生。もう、行ってもいいですか？」マルティンが先生に背を向けて走り去ろうとすると、先生はマルティンをしっかりつかんでひきとめる。「待ちなさい、マルティン」。先生は声をひそめてたずねた。「きっぷ代がないとか、そういうことかい？」

「マルティンのけなげなふるまいもそれまでだった。マルティンは、ごくんとうなずいた。そして、ボウリング場の雪におおわれた手すりに頭をもたせかけると、世にもつらそうに泣きだした。」正義さん＝ベク先生は、両親にプレゼントを贈るお金も含めて、遠慮するマルティンにやさしく手渡す。どうしたらいいのかわからなかったマルティンだが、「ようやく、おずおずと手をさしのべて、先生の手をそっとにぎった。」

もし、寄宿舎に残るとすればマルティンはジョニーといっしょのはずだった。そもそもジョニーはアメリカにいる両親に、先にドイツに帰るように言われて、実は両親から見放されたという過去をもっていた。そして文筆の才があるそのジョニーは、この物語の語り手と近い位置にいる。悲しみを知る少年たちの友情が、貧困や争いにあふれる現実を超える希望の光ともなる。

この物語を読んで自分が味わった悲しい経験を思い起こす者は多いだろう。そして、悲しみを通してこそ、尊いものかけがえのないものが自覚されていく、その真実をあらためて学んでもいくだろう。悲しみは希望や勇気の源にもなりうるのだ。

島薗 進（しまぞの すすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

「綴の錦」を解きほぐす

能楽では、主人公の思いが、縁語や掛詞などを駆使した詩の言葉で表現されるが、それは、「綴の錦」つまり、豊かなイメージをもった単語の継ぎはぎにすぎないと、低く評価されることもあった。そのように見られてしまう原因のひとつは、述語の省略などによって、文章の意味がとりにくいことにある。ここでは能の作品〈羽衣〉の一節を採り上げて、詩の言葉を鑑賞したい。

〈羽衣〉の舞台では、最初に漁師（ワキ）が登場する。漁師は、三保の松原の松に掛かる美しい衣を発見する。「立派な衣だから、家の宝にしよう！」と言い、持ち帰ろうとする。そこに主人公（シテ）の天女が現れる。「衣を返してほしい、衣がなければ天に帰ることができない」と訴える。これを聞いた漁師は「天女の羽衣であれば、もはや国宝！ぜったいに返さない！」と力を込めて言い放つ。非情な壁が、天女の前に立ちはだかる。

舞台は、天女が嘆き悲しむ場面へと進む。ゆっくりした掛け声を伴った打楽器の八拍子のリズムにのって、コーラス隊である地謡が、天女の嘆きの言葉をじっくり歌う。次の七句を、まずは音読していただきたい（二句一句の切れ目は「、」で、上句と下句の切れ目は「・」で示す）。

迦陵頻伽の・馴れ馴れし、
声今さらに・僅かなる、
雁の・帰り行く、
天路を聞けば・懐かしや、
千鳥鴎の・沖つ波、
行くか帰るか・春風の、
空に吹くまで・懐かしや

「迦陵頻伽（極楽浄土の鳥）」「雁」「千鳥」「鴎」などの鳥、「天路（天への道）」「沖つ波」「春風」などの風景を表す言葉が並び、それだけでイメージはふくらむが、文章の意味がわかればより面白くなる。以下、野暮を承知で解説する。

冒頭二句は「天女の私が馴染んできた迦陵頻伽の声が、今ますます、かすかになっている」と訳せる。「馴れ馴れし」の主体がわかりにくいが、迦陵頻伽ではなく天女である。

次の二句は「雁が帰って行く天の路に、その声を聞けば、懐かしさがこみあげてくる」となる。なぜ天女は、雁の声が懐かしいと言うのか。それは天女が、雁の声を迦陵頻伽の声に見立てているからだ。

最後の三句は、意味上では二つに分かれる。前半は「千鳥や鴎が沖つ波を行き帰りしている」。後半は「春風が空に向かって吹く。そう思うといっそう、天が懐かしい」となる。天女の視線は、空を飛ぶ雁から、海上の「千鳥」「鴎」にうつり、さらに、千鳥や波が行き帰りする原因となる「春風」に向く。その「春風」は空を思い起こさせ、天女は悲しみにくれる。

舞台を見てみよう。この部分でシテ（天女）は、能舞台の上をわずかに歩み、空を見上げ、さらに歩み、止まって泣く。そのわずかな動きの中に、嘆きの感情がこめられる。その映像をぜひ、インターネット上のHP「能〈羽衣〉楽譜付」（このタイトルで検索）でご確認いただきたい。「迦陵頻伽」以下の「綴の錦」美しさも実際の音楽で味わってもらいたい（「迦陵頻伽」は右下のタイマーで23分6秒から始まる）。

HP「能〈羽衣〉楽譜付き」〈羽衣〉（シテ：河村晴久）
https://rcjtm.kcua.ac.jp/archives/hagoromo.html

藤田 隆則（ふじた・たかのり）
1961年山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。

道しるべ

天岸浄圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

玉虫厨子

…気がつくと目の前に血まみれの体があった。さっき、自分の前に体を横たえてくれた男だ。その時は、もはや食べることができなかった。だから男は崖から身を投げてくれたのだ。強烈な血のにおいが獣性を蘇らせてくれた。血を舐め肉を喰らう。子供たちにも分け与える。…たすかった。

今年は聖徳太子の一四〇〇回忌にあたる。先日、奈良国立博物館の「聖徳太子と法隆寺」展で、久しぶりに玉虫厨子を目の当たりにした。名の通り玉虫の羽根を敷いて荘厳とした厨子は、当初の光りを少しながら今に伝えている。完成時のありさまは壮麗であっただろう。しかし、玉虫には大変な迷惑と思う。

推古天皇の念持仏を納めたと伝えられる厨子の台座には、「捨身飼虎」と「旋身聞偈」とよばれる仏画が描かれている。はじめの話しは「身を捨てて虎を飼なう」の物語である。

「施身聞偈」（身を施し偈を聞く）は、あるとき修行者は真理の半句を耳にした。続きが聞きたい。しかし、声の主が知れない。探すと痩せ衰えた羅刹がいた。「先の詩句はあなたが吟じたのか」と尋ねると、羅刹は「そうだ」と答えた。後の句をと願うと空腹で声が出ないという。「聞かせれば此の身を与える」というと、「同じ言葉でどれだけ騙されたか…」といわれた。彼は固い約束の上で後の句を得た。句を崖に書き残して身をひるがえした。行者は帝釈天に抱かれていた。いずれも釈尊の前生ということである。

想像だが、この厨子を女帝に勧め得たのは太子の外にない。意味は明らかである。国を治める者が身を捨てても護るべきは何か。求めるべきは。それが明らかでこそ民衆の真の信頼を得ることができる。

一四〇〇年後の政治は…

編集後記

「お寺」という年間テーマ。これからの寺院の在り方についてご意見を頂戴したいと思ったのだが、それよりも「お寺」が元来持っているものをそれぞれに浮き彫りにして頂いた気がする、それも本質的な意味において。

コロナ禍は時間がたつにつれて雨が浸み込むように堅固であったもの、今まで当たり前であったものを切り崩していく。そして表面のメッキが剝がれて決して見えてこなかった地肌を徐々にむき出しにしていっているようにも思える。

「お寺」の歴史は古い。その中には穏やかな平和な時代、天災疫病戦争等に見舞われる困難な時代があったはずである。幾たびかの時代の変遷を経て今があるのだと考えるのが自然である。適応できなかったら淘汰されていく。では「お寺」の持つ潜在力とは何か？生と死の問題に答えてくれる処、人生で一番大事なことを教えてくれる処であるという、長年培われてきた日本人のDNAにある二種の「安心感」というものではなかろうか。今は「お寺」の地肌、その力が試される時であると思う。

合掌

表紙の絵　月下説法童女

仏像が人の形で最初につくられたのは西暦一世紀の後半であったと推察されます。現在年代銘のある仏像は二世紀初めのものですので、それ以前の数十年前頃に造り始められたのでしょう。ガンダーラ地方とマトゥーラ地方の初期の仏像は、目を大きく開き右手を前に出して雄々しく説法をされている釈尊像であり、菩薩像は釈尊入滅後五十六億七千年後に仏として出現される弥勒菩薩像だけでした。弥勒像も同じように右手を前に出した説法印（この形は我が国では施無畏印と言われていますが、元々は説法の印相）でした。明治に入り神仏分離以降、多くの宗派が説法をするようになりましたが、それまでは儀礼のみで、浄土真宗だけが説法と聞法を大切に続けてきました。説法と聞法がない仏教というのは考えられません。コロナ禍ですが、道標が説法のひとつになりますように。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）